

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

講師 小川 麻里子

1. 教育の責任

健康科学大学の建学の精神・基本理念は、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」である。教員は、地域医療の担い手になる理学療法士・作業療法士（以下、医療人とする）を養成するために、医療人として身に付けておくべき知識・技術・態度などの実践的能力を学生に習得させ、国家試験に合格させることが最大の使命となっている。

私は、健康科学部リハビリテーション学科作業療法学コースの教員として、現在は作業療法の専門科目や実習、健康科学部の総合基礎科目を中心に担当している。過去には、看護学部看護学科の専門科目も担当していた。過去2年間の担当と授業科目は以下の通りである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

2023 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	前期	必修	13名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	13名
作業療法演習Ⅰ-1	前期	必修	18名
作業療法演習Ⅰ-2	後期	必修	18名
作業療法演習Ⅱ-1	前期	必修	29名
作業療法演習Ⅱ-2	後期	必修	28名
作業療法演習Ⅲ	前期	必修	6名
リハビリテーション特別講義Ⅰ	前期	選択	67名
運動学実習	後期	選択	18名
作業療法評価学	後期	必修	30名
基礎作業学	後期	必修	名
解剖学演習	後期	選択	35名
ジェンダースタディーズ	後期	選択必修	35名
作業療法特論	通年	必修	38名
臨床実習Ⅰ（見学実習）	後期	必修	28名
臨床実習Ⅱ（総合実習）旧カリ	通年	必修	6名
臨床実習Ⅱ（地域実習）新カリ	後期	必修	28名
臨床実習Ⅲ（総合実習）旧カリ	通年	必修	6名

リ			
臨床実習Ⅲ（評価実習）新カリ	後期	必修	28 名
リ			
臨床実習Ⅳ（総合実習）	前期	必修	32 名
臨床実習Ⅴ（総合実習）	通年	必修	32 名

2024 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	前期	必修	13 名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	14 名
作業療法演習Ⅰ-1	前期	必修	26 名
作業療法演習Ⅰ-2	後期	必修	26 名
作業療法演習Ⅱ-1	前期	必修	17 名
作業療法演習Ⅱ-2	後期	必修	17 名
ジェンダースタディーズ	後期	選択必修	25 名
運動学実習	後期	必修	26 名
作業療法評価学	後期	必修	27 名
基礎作業学	後期	必修	27 名
解剖学演習	後期	選択	26 名
リハビリテーション特別講義Ⅱ	後期	選択	69 名
作業療法特論	通年	必修	27 名
臨床実習Ⅰ（見学実習）	後期	必修	27 名
臨床実習Ⅱ（地域実習）	後期	必修	17 名
臨床実習Ⅲ（評価実習）	後期	必修	18 名
臨床実習Ⅳ（総合実習）	前期	必修	27 名
臨床実習Ⅴ（総合実習）	通年	必修	27 名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 健康科学大学クラシックバレエ・ダンスサークル 顧問
- 2) HSU wind ensemble 顧問
- 3) 目黒学院高等学校 キャリアゼミ講師
- 4) 山梨県地域ケア個別会議 アドバイザー
- 5) 日本作業療法士協会 会員

- 6) 山梨県作業療法士会 会員
- 7) 山梨県作業療法士会 MTDLP 推進委員
- 8) 日本パラスポーツ協会（日本障害者スポーツ協会） 会員
- 9) 東京都障害者スポーツ協議会 会員
- 10) 日本臨床スポーツ医学会 会員
- 11) 大学広報委員会
- 12) 学生募集委員会
- 13) 附属図書館運営・紀要編集委員会
- 14) 年報委員会

1-2) の活動では、学生生活の質の向上だけでなく、学外の団体との交流やイベント参加などを通じて学生と地域との交流などの推進にもつながっている。また、地域・社会での教育活動も健康科学大学の教員として必要であると考え、3-4) などの活動・参加も積極的に務めている。そのことにより、作業療法の普及活動につながるだけでなく、実際の現場で患者や家族が現在どんなことに悩み、苦勞しているのかを学生に伝えることができている。そして、認定作業療法士の資格を有していることにより、5-6) の協会に属し、現在は 7) として MTDLP（生活行為向上マネジメント）の普及推進に携わっている。作業療法演習Ⅰ・Ⅱの講義内でも MTDLP を使用した事例提示や事例検討にこの活動が活かされている。8-10) に関しては作業療法士としてだけでなく、初級障がい者スポーツ指導員の資格を有していることにより、実践現場での障害者のスポーツについての講義に活かされている。

2. 教育の理念・目的

大学での学びでは「学習」ではなく「学修」が必要であると考え。高等学校までの「学習」では学校で教わったことを理解し覚える受動的な詰め込み教育がなされているのが現状だと推測する。大学では、与えられたこと受動的に学ぶのではなく、能動的に「自ら学ぶ」姿勢を身に付け、将来問題が発生しても自力で解決策を模索し、論理的かつ柔軟な判断を下せるようになる必要があると考える。そのためにも自身の興味を探究し、そこで生まれた疑問を自分たちの力で解き明かし、他者と共有できる知識として構築していく必要がある。この自ら問題点をみつけそれを解決する姿勢は、医療人として働くために必要不可欠な要件である。

大学教育では、自ら学んだ先に生じる疑問を解決するためのノウハウやスキルを教授し、習得させることが必須であると考え。教員が手取り足取り全ての答えを教えてしまうのではなく、学生自身が問題解決できるように導き、見守ることが必要であると考え。

1) 自ら問題点を見つけ、解決できる作業療法士の養成

教育理念に挙げた「自ら学ぶ」力を身に付けさせるためには、まずは講義内容に興味

を持たせる必要がある。その興味の中から、「これはどうなんだろう?」「どうしてこうなるんだろう?」などといった疑問が生まれ、自分から調べようとする動機付けをさせることが目的である。しかし、今まで受動的な学習しかしてこなかった学生にとっては、疑問を見つけることも困難な学生も多いため、教育者から疑問を投げかけて解決策を模索させることも必要であると考ええる。

2) 作業療法の面白さと奥深さを伝えながら、最低限の知識を身に付けさせる

リハビリテーション学科では卒業後には国家試験という関門があるため、膨大な知識を効率よく吸収させることも求められている。これらの勉強は、暗記的な作業が多く、多少、一方的な押し付け教育となり、学生の学習意欲が下がることが懸念される。モチベーションを維持させつつ、膨大な知識をしっかりと自分の中で消化させることも学生教育の目的と考える。

3. 教育の方法

・問題解決型授業

教育理念に挙げた「自ら学ぶ」力を養うために、積極的に問題解決型授業を取り入れている。自ら問題点を見つけ、問題解決のためにはどのような情報が必要か、情報収集のためにはどのような方法があるか、得られた情報がどのように利用可能か等を考えることで「自ら考える姿勢」を身に付けさせている。1年生の科目である作業療法評価学や基礎作業学などでは、問題自体を自身で見つけることが困難な学生もいるため、問題を教員から提示してその問題について調べることから始めている。また、調べた結果を発表し合うことで、自身では気付かなかった視点や答えも見えてくるだけでなく、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の育成も図りたいと考えている。

・視覚教材や視覚的効果を用いた授業

事例提示なども学生がイメージしやすいように文字だけでなく写真や動画などを用いて実施している。また、YouTube など学生が気軽に視聴できる動画なども授業内で紹介することで、学生の興味関心を高めたいと考えている。特に作業療法の専門科目の講義では、実際の評価・治療場面の動画などを活用して対象者を身近に感じ、現在学んでいる内容が将来どのように活用できるのかをイメージしてもらえるように工夫している。

・Teams を活用した授業の工夫

一方的な講義形式の講義では学生の興味・関心を引き出すことは困難である。どうし

ても教員の一方的な講義になりがちな Teams でのオンライン授業でも、学生の発表形式や問題解決型授業などを積極的に取り入れて学生を飽きさせない工夫を行っている。

4. 教育の成果・評価

本学では、FD 委員会によって実施されている授業評価アンケートや教員相互授業参観の結果を活用して、授業内容の反省点を振り返り、改善に活かすことが可能である。また、実際の授業内容についても、項目毎に分析を行い、コメントの内容とともに、次年度のシラバスや授業内容に活かしている。

・作業療法評価学

この科目は、リハビリテーション学科作業療法学コースの 1 年生にとって進級に関わる科目の一つで、今後の専門科目を学ぶ上でも重要な科目である。2024 年度は登校での授業のため、授業の導入時に事例を紹介したり、授業内で実際の検査・測定を体験する時間を設けたりして興味・関心を持ってもらえるように工夫した。また、学習範囲が広いため理解すべきポイントを絞った授業を心がけた。その結果、授業評価アンケートのほとんどの項目で 4.0 以上を得ることができた。また、教員相互授業参観のアンケートでは、「測定に係る器具の使い方の説明は、平易な言葉で分かりやすい。測定の仕方について、何がポイントかを適宜明確にしつつ説明が為されていた。学生の理解度を伺いながら進行していた。これらより、より深い理解に繋がるものと思う。」とのコメントを得られた。

・基礎作業学

この科目は、リハビリテーション学科作業療法学コースの 1 年生が初めて治療で用いる作業について学ぶ進級に関わる必修科目である。2024 年度は、作業を実際に体験しながら分析を行ったり、対象者の作業場面の写真や動画などの視覚教材を多く取り入れたり、グループワークなどのアクティブラーニングを積極的に取り入れたりして授業への興味・関心・積極性を促した。また、解剖学や生理学など前期で学習したこととの関連性について説明することを意識し、他科目との関連性を感じてもらえるように工夫した。このことにより、「他科目との関連性」や「将来に役立つ授業」との項目で全体平均よりも高値が得られた。

5. 今後の目標

短期目標：授業内容の改善、自己研鑽を積む

授業評価アンケートや教員相互授業参観のコメントだけでなく、日頃の学生の様子などから授業内容や方法の改善が必要だと感じている。特に最近では、1 年次の専門科目を

担当することが多いことから、予習・復習などの学習習慣をつけることを促しつつ、他科目との関連性などを伝えていくことが大切だと考えている。今後は、前年度の反省などを活かし、学生に興味・関心を持ってもらい理解しやすい授業展開を目指していきたい。また、学生と卒業後もつながりを持ち、どのような作業療法士に学生が成長できているかを評価し、自身の教育に反映させていきたい。

様々な研修会や勉強会への参加などを通じて自己研鑽を積むことで、学生への教育をアップデートしていくことが可能になると考える。また、臨床での経験を積み、実際の臨床現場で用いられる手技や思考を忘れないようにしていくことが大切である。この経験が学生への教育に活かされ、臨床実習前などの症例検討では常に新しい症例を提供できる。そして、専門分野での能力維持のため、所属学会や研修会への積極的な参加や研究論文を毎年1報以上発表する。

長期目標：地域及び世界で活躍できる作業療法士の養成

本学の3つの約束の中に「地域に必要とされる卒業生に」と掲げている。教育、研究活動だけでなく課外活動などを通じて地域とのつながりを大切にして、地域社会が求めている大学や大学教員の役割、作業療法士像についての情報を得ていきたい。そして、臨床現場での経験も積み、自分自身が学生から憧れられる存在になりたいと考えている。また、本学は世界作業療法士協会（WFOT）の認定養成校になっている。日本国内にとどまらず、将来世界で活躍できる作業療法士の養成を行う。